黒の姫君

エル.L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の姫君

【Ｎコード】
Ｎ３６５９Ｈ

【作者名】
エル・Ｌ

【あらすじ】
王位を剥奪された王女と、そんな彼女に仕える執事の、何でもない日常のお話。主に一話完結で、オムニバス形式になっているので、現在形の話だったり、過去のお話だったり。ご了承くださいませ、ご主人様。

第1話：ある王女と、ある執事。

――扉を開けると、その向こう側の空間は、別世界のように白く濁っていました。

「……サラ様？」

私は、主（あるじ）を呼びました。

「……タリンか……」

その白く濁った世界の中から、気だるそうな主（あるじ）の声が届きます。

「……サラ様、体に毒ですよ」

私は言いながら、固く閉ざされた窓を開け放ちました。

……白く閉鎖されていても、私にとっては、もう慣れきった主(あるじ)の小さな部屋……。

逃げ場を失い、滞っているしかなかった紫煙が、ようやく出口を見つけ、風と共に去っていきます。

「……眩しい……閉めろ……」

そう言って、主(あるじ)はまた、紫煙を吐き出します。

この部屋の視界が白く遮られていたのは、主(あるじ)がフカす葉巻のせいです。

「……うるさい……私に命令するな……」

相変わらず気だるそうな声で言って、主(あるじ)は、私に背を向けました。

「男のお前には解るまい……」

「……然様(さよう)ではございますが……」

それを言われてしまっては、私にはもう、何も言えなくなってしまいます。

主がいつも以上に不機嫌なのは、月に一度の「使者」が齎(もたら)すもの。

天地が真逆になろうとそれが訪れない私に、「解(わか)れ」というのも、無理難題ではありますが…。

しかし、主(あるじ)の気鬱(きうつ)の原因は、それだけではないのです。

「……何故こんな時ばかり“女”なのだ……」

主(あるじ)の、苦しげな声が聞こえてきます。

「……サラ様……」

私が浅く溜め息を吐(つ)いて主(あるじ)の名を紡ぐと、クッションがこちらへ飛んできました。

……主(あるじ)が私に投げたのでしょう。

「“様”を付けるな。何度言ったらわかる」

「……申し訳ありません」

私は謝りながら、主(あるじ)の横たわる寝台に、静かに腰をおろしました。

――主(あるじ)は、命を授かることのできない身体です。

男児が生まれなかったこの王室で、王位を継承しなければならない第一王女でありながら……。

国王の側室である、第二王女が「次期女王」となる空前絶後の事態に、

その混乱と憤りの矛先は、我(あるじ)が主へと向けられました。

城の者の殆(ほとん)どが、主(あるじ)を疎み、嫌い、憎む者さえ出てくる始末……。

故に、この小さな部屋に押し込まれてなお、子を生せない身体に「使者」が齎(もたら)すものは、

主(あるじ)にとって苦痛以外の何物でもないのです。

「……サラ。本当に、お止めになった方が」

葉巻に再び火を点けようとした主(あるじ)の手を、私は止めました。

「……指図するなっ」

そう言って、主(あるじ)は私の手を弾くと、新しい葉巻に火を点けます。

「サラ……」

それが体に毒である事は、私も、もちろん主(あるじ)も理解しています。

ですが、それを強く注意することが、私にはどうしても出来ません。

執事失格、と言われるかも知れませんが……。

きっと、そうやって咽を焼く事でしか、主(あるじ)は自分を慰められ無いのだと思うから。

「……タリン……」

ふいに、主(あるじ)が私を呼びました。

「はい」

私は、ゆったりと振り返ります。

「……何故、お前は私に仕える？」

「……は？」

この王室に仕えて十数年。

今までお仕えした、どの主にも投げかけられる事の無かった問い

に、私の口からはとても間抜けな声が出ました。

そして、仰る意味がわかりません、というニュアンスを込め、私は首を傾げてみせました。

主(あるじ)は、深く紫煙を吐き出して、私を見つめます。

「……私は、とうに第一王女の冠を外された。しかし何故、お前のような

『特一等』の執事が、未だ、私のような者の下(もと)に仕える？」

酷く哀しい顔をして、主(あるじ)は二度、私に問います。

「お前には、もっと相応しい主(あるじ)が、他にいるだろうに……」

そう言って、主(あるじ)は短くなった葉巻を灰皿へ押し込めると、新しい葉巻へと手を伸ばしました。

「サラ」

私は、後ろから主(あるじ)のその腕を止めます。

主(あるじ)は、私の腕が体に絡みつく時、ビクリと体を波打たせました。

……それは、図らずも、私が《あるじ》を抱きしめる体勢です……。

「私が、お嫌いですか？」

「え」

常に低いものとは違う、年相応の愛らしい声が、主(あるじ)の口を吐(つ)いて出ました。

「……私は、貴女をお慕いしております。ですから、貴女の下(もと)に在りたいと」

囁くような私の声に、主(あるじ)は耳まで紅くして、私を振り返ります。

「お前っ、頭でも打ったのかっ？！？！」

主(あるじ)が、声を裏返しながら私に言いました。

「いいえ、サラ。私はどこも打っていませんよ」

……むしろ貴女に心を打ち抜かれましたよ。なんて、死んでも言いませんが。

「……そのっ……慕っている、と言うのは……人間として、だよ……なっ？」

疑問系ではなく、そうだと言ってくれ、と言う目で、主（あるじ）は私を見上げてきます。

肌色が残っていないくらい顔を紅くしておいて、貴女と言う人は……。

そんな、野暮なこと仰るのですか。

「それは……ご想像にお任せします」

私はそう言って、主（あるじ）の寝台から立ち上がりました。

「なっ……！？」

スルリとその手から答えが逃げてしまった主(あるじ)は、口を開けたまま、私を見ています。

「紅茶、お持ちしますね」

そんな主(あるじ)に、私はニコリと微笑んで、何事も無かったように執事の顔へと戻ります。

貴女のその、時折見せる本来の“貴女”が、どうしようもなく愛しくて。

だから、執事は辞められません。

ね？

—

Merci...

—

第1話：ある王女と、ある執事。（後書き）

国語において、敬語を扱った授業の時間は、殆ど欠席していたエルです…。

色々おかしいかとは存じますが、大目に見てあげて下さい…。

第2話：執事と、ある執事。（前書き）

ＢＬ要素を含みます。苦手、意味が分からない、という方は、お戻りする事をお勧めします。

第2話：執事と、ある執事。

ふと、人の気配を感じて、私は目を覚ましました。

「……サラ様……？」

主が私を訪ねてきたのかと思い、すぐさま起き上がります。

そして、スタンドの灯りを点けましたが…来訪者はどうやら、我が主ではなさそうです。

「……セバスチャン……」

「あら、おはよ」

ぼんやりと灯りの中に浮かび上がったのは、執事仲間のセバスチャン（男性です）の姿でした。

「まだ夜ですが。というか、何をしているんですか、こんな時分に……」

「野暮なこと訊くのね？　わかってるクセに」

そう言って、セバスチャンはニヤリと微笑みます。

「……わかりません。というか、わかりたくありません」

髪や頬に絡んでくるセバスチャンの指を払いのけて、私は彼を睨みつけました。

「相変わらず冷たいわねー」

今度は寂しそうに微笑んで、しかし、何を考えているのか、セバスチャンは私の寝台に上がってきます。

「こらコラこらコラ」

私は、そんなセバスチャンの肩をつかみ、寝台から突き落とそうと試みます。

「なぁに？」

セバスチャンは、顔色一つ変えずに、私の力に抗います。

ニコニコと笑いながら、恐ろしい程の力で、あっという間に形勢逆転…。

「それ私の台詞（せりふ）です」

組み敷かれ、覆いかぶさるセバスチャンを、さらに睨みながら、私は言います。

「そんな怖い顔しなくても……」

「黙りなさい。これが私の真顔です」

「ウソツキ」

囁きとも、吐息ともつかぬ声で、セバスチャンが言いました。

同時に、首筋に何か生温かいモノが這う感覚が走ります。

「セバスチャッ」

「“お姉様”の前ではあんなに優しく笑うクセにっ……」

耳元で、セバスチャンの歯がギリリと音を立てるのが聞こえました。

それから、彼は私の胸倉を掴み、酷く締め上げてきます。

「……セバス、チャン……？」

カタカタと震えるセバスチャンの肩に、私はそっと、腕を回します。

私はようやく、セバスチャンの様子がおかしい事に気がつきました。

「……セバスチャン……どうしたのですか……？」

体を起こし、セバスチャンから離れ、顔を覗こうとしましたが、彼はそれを拒み、私に縋りついてきます。

私は、ギョッとしました。

しょっちゅう、ふざけて私に抱きついてくるような性分ですから、彼の体つきは、嫌でも把握しています。

口調や性格からはおおよそ想像できない程、セバスチャンは、男性らしく筋肉質な体でした。

それが、弱々しく、今にもグニャリといきそうなくらい、痩せ細っていたのです。

「……セバスチャン……」

私は、もう、彼を抱きしめる事しか出来ませんでした。

鼻をぐずり、ぐずりと鳴らす様子から、セバスチャンが泣いている事は、もはや明確です。

「……私っ……自信が、無いの……」

嗚咽混じりに、彼は小さな声で、私に言います。

「……フロラ様の……執事として、私……」

あぁ、そういう事なのか…。

私は、頼りないセバスチャンの背中をさすりながら、彼の苦労を思います。

ある日、突然に「次期女王」付きの執事となったその重圧が、セバスチャンの体や心を蝕んできたのだと思います。

特にここ数ヶ月は、何かと王室の中が騒がしかった事もあり、それは殊更でしょう。

私よりも長くこの王室に仕え、何事にも動じないような彼であっても、やはり、目に見えない

「重厚な鎖」を背負うのは、簡単ではないようです。

この2年間、セバスチャンはよく耐え、よく仕えてきたと、改めて感心しました。

「……セバスチャン」

彼を促しながら、顔を覗き、私は言いました。

「今、次期女王が笑顔でいられるのは、誰のお陰でしょう？」

わざと含みを持たせて訊ねると、彼は少し、困ったような顔をします。

「過信なさい、セバスチャン。あの方が笑顔でいられるのは、他ならぬ

貴方自身の、日々の積み重ねなのですから」

「……タリン……」

涙を拭きながら、彼は漸く視線を上げて、私を見つめてきました。

「……言ってて、恥ずかしくないの？」

せっかくの励ましの言葉も、残念ながら、その一言で無益にされてしまいました。

もっとも、それは照れ隠しなのだと、セバスチャンの様子から窺い知れますが…。

「えぇ、恥ずかしいです」

「じゃあ何で言うのよっ！」

相当照れさせてしまったのか、彼は掌でビシビシと、私の胸板を叩いてきます。

「ハハハ。これでも、『特一等』の執事ですから」

「キィーーッ！　最近まで私の方が格上だったのにぃっ！！」

「そういえば、そうでしたね」

私はセバスチャンをもう一度抱きしめて、見えないところで、意地の悪い笑みを浮かべます。

「お詫びに、食事でも作りましょうか？　せーんぱい（はぁと）」

↑確信犯

「タッ……タリンのバカ～～～～～～～ッ！！！」

…何はともあれ、彼が元気になってくれたようで、良かったです。

【おまけ】

「……タリン」

妙にソワソワしながら、主は私を呼びました。

「はい」

「……いや、あれだ。お前のプライベートに、私が口を出すのも

なんだが……」

「はい？」

「……せめて、見えない所に、な」

主は私の首を指さします。

私は、ドレッサーに振り返りました。

「……セバスチャアアアアアアアアアアアンッ！！！」

…いつの間に付けたのでしょう。

私の首筋に、とてつもなくクッキリと、キスマークが刻まれているではありませんか。

恩を仇で返す、とは、この事です。

――その後、セバスチャンはものすごく怖い目に遭ったとか、そうでないとか…。

― Ｍｅｒｃｉ．．．―

第2話：執事と、ある執事。（後書き）

タリンは、怒らせると2番目に怖い人です。
多分、1番はサラなんじゃなかろうかと…。

ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3659h/

黒の姫君

2010年10月14日01時36分発行